

木村定三コレクション「欧米陶磁器およびガラス工芸」調査報告目録

愛知県陶磁美術館 長久 智子

凡例

- ・本目録は、愛知県美術館所蔵「木村定三コレクション」の中から、ヨーロッパで制作された陶芸・ガラス工芸作品を掲載し、解説を付したものである。
- ・各作品名は、各作品の調査者の見解を勘案して決定した。
- ・各作品のデータは、陶芸をオランダ・イギリスの制作地に分けた後、ガラス工芸を附した。掲載番号、作品名、作者、製作年代、寸法 (cm) コレクション番号 受入時名称の順に記載した。
- ・作品解説はすべて愛知県陶磁美術館 長久智子が執筆した。
- ・陶磁器の調査は2005 (平成17) 年に始まっており、一次調査は愛知県美術館学芸員の古田浩俊、鯨井秀伸が担当した。2016 (平成28) 年、欧米で制作されたものに特化した調査が愛知県陶磁美術館の協力により行われ、副田一穂、長屋菜津子が調査補助を担当した。上記調査者以外にも、仲野泰裕氏、森達也氏の助言、協力を得た。

編集 愛知県美術館 長屋菜津子

陶磁器

I オランダ デルフト窯



- 1 あいえしまもん 藍絵縞文 アルバレッコ
17世紀中頃-18世紀前半
高17.8cm 口径14.3-15.2cm
底径15.4-15.5cm
M1194 (藍絵縞文水差)

轆轤成形、外面および底部は撫で仕上げ。内面には轆轤挽き痕が残る。胎土は夾雑物少なく、目の細かい淡黄色、いわゆる軟質の陶器質。青味の強い錫白釉を外面から内面まで全面に掛け、酸化コバルトを含む青色顔料で文様を施した、いわゆる釉中彩。口縁部分および内面底部に釉剥がれ多。底部は高台のない、いわゆる碁笥底^{いぼぞこ}。接地面は釉剥ぎ、底面は施釉の痕跡あり。12本の太さの異なる横縞文をフリーハンドで筆描きする。

本来の用途は膏薬を入れる薬壺。日本にも伝世品は多く、「阿蘭陀焼」として茶陶の「水指」に転用される。





2 あいえかきもんきら 藍絵花卉文皿 (2枚)

17世紀末-18世紀前半

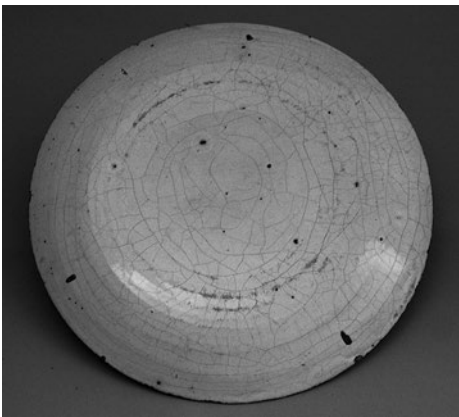
高1.7cm / 1.8cm

口径22.0cm / 22.0cm

底径8.7cm / 9.2cm 鈔幅2.5cm

M1336 (染付東屋文鉢)

型成形後、轆轤で削り調整仕上げ。青味の強い錫白釉を外側から内面まで全面に掛け、酸化コバルトを含む青色顔料で文様を施した、いわゆる釉中彩。表面全面に花卉文を描く。口縁部分に釉剥がれ多。全体に貫入多。底部は碁笥底。裏面鈔部分に三点目痕。





3 白釉輪花鉢

17世紀中頃-18世紀

高6.2-6.5cm 口径34.5cm

高台径10.5-10.7cm

M1548 (白釉輪花鉢)

型成形。花卉が大きく膨らみ、外反した9花形で、脚を付く。錫白釉を全面に掛ける。玉縁高台。裏面口縁部分に3か所目痕あり。外箱蓋表に貼紙「白阿蘭陀/菓子鉢/第参十式/松之金」、蓋裏に墨書「此鉢者筑前州兵庫屋善右衛門所/歳也安永九年春三月購得鷹見右近/衛門」。

輪花型の白釉皿は日常使いの雑器として17世紀オランダ静物画や、フェルメールの人物画にもよく描き込まれている。日本では本作品外箱貼紙にあるように「白阿蘭陀」と呼ばれた。器形は金属器に由来する。



4 あいえちようからくきもんひきごがたへい
藍絵花鳥唐草文瓢形瓶

17世紀末-18世紀第一四半期

高17.4cm 口径1.7cm 底径7.8cm

M1631 (藍絵花鳥唐草文瓢形徳利)

轆轤による型成形。胎土は夾雑物少なく、目の細かい淡黄色、いわゆる軟質の陶器質。錫白釉を器表面全面に掛け、酸化コバルトを含む青色顔料で文様を施した、いわゆる釉中彩。碁笥底で接地面は釉剥ぎ。青色顔料で釉中に「1」「C」と読める記号を組み合わせたモノグラムがあるが、不明。日本では茶陶の中で「徳利」に見立てられるもの。





5 あいえちやうもんひまごがたちよげいへい
藍絵花鳥文瓢形長頸瓶

17世紀末-18世紀第一四半期

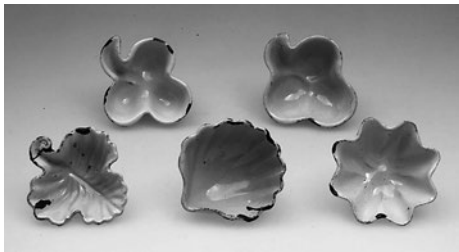
高61.5cm 口径13.5cm

胴径33.0-35.3cm 高台径19.0cm

M2209 (花鳥文瓢形花瓶)

轆轤による型成形。胎土は夾雑物少なく、目の細かい淡黄色、いわゆる軟質の陶器質。錫白釉を器表面全面に掛け、酸化コバルトを含む青色顔料で文様を施した、いわゆる釉中彩。口縁部分および高台接地面部分との境に釉剥がれ多。接地面は釉剥ぎ、底面は施釉。「F」「5」「2」と読める記号を組み合わせた青色顔料による釉中銘あり。口は大きく外反し、頸部下より胎は八角に面取り。面の中に各4本のリブ装飾を施す。文様は如意頭文・屈輪文を用いた花鳥文。

オランダ語で「カストステル」と呼ばれる、飾り壺・瓶セットの一。国内には珍しい上質な大型のデルフト窯製品として貴重である。(長久報告文pp.75-80参照)



6 はくゆうこぼち
白釉小鉢 (5口)

18世紀

(1) クローバー形 (2口)

高3.6cm / 3.7cm

口径8.0-8.8cm / 8.3-9.5cm

(2) 星形

高3.7cm

口径8.0-8.2cm

(3) 葡萄の葉形

高3.4cm 口径8.0-8.4cm

(4) 貝形

高4.5cm 口径7.8-8.3cm

M2291 (紅毛寄酒杯5客)

型成形。胎土は夾雑物少なく、目の細かい淡黄色、いわゆる軟質の陶器質。高台接地面は露胎、ほか青灰色がかった錫白釉を全面に掛ける。

本来はナッツ皿と思われる。本来のセットの形ではなく、別々のデザインの皿を後世に組み合わせた形が伝世したもの。

II イングランド



1 かつゆうこうたいまら 褐釉絞胎皿 (5枚)

18世紀中頃

高1.8cm

口径19.1-19.4cm / 18.9-19.0cm /

19.0-19.3cm / 19.2-19.3cm / 19.3cm

底径12.5-13.5cm 鏝幅2.3-2.4cm

M2216 (墨流皿5客)

型成形。白色粘土と鉄の濃淡による褐色・赤褐色・黒色の4色の粘土を練り合わせて(絞胎)マーブル文様とし、褐釉を全面に掛ける。平底、底部に三点目痕。表面見込みに重ねピン痕2か所。

バーズレム窯か。

III そのほか



1 りよくゆうほしゆつきへい 緑釉把手付瓶

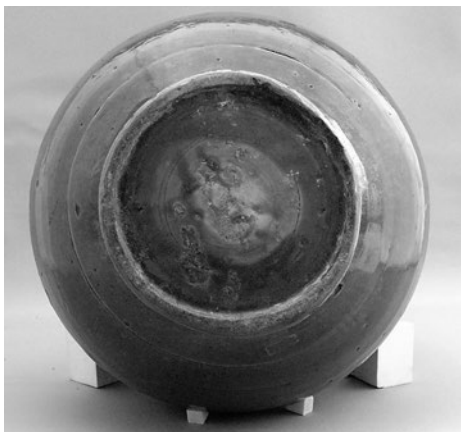
(不明)

高27.7cm 口径6.3-6.5cm

胴径26.3cm 高台径15.7cm

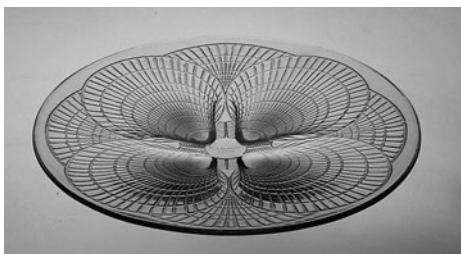
M1709 (緑釉手付瓶)

輪積み成形の後、轆轤で削り調整仕上げ。把手は手捻り。付け高台。胎土は鉄分を多く含んだ目の粗いもの。高台裏接地面を除く全面に鉛緑釉を掛ける。高台裏に三点目痕あり。胴部は球状に大きく膨らませる。口縁部分の形状から、別造の蓋(おそらく金属製)を取り付けたものか。「スペイン」と伝わるが、製作地・製作年代不明。



ガラス

I フランス



1 コキーク文オパールセントガラス皿

デザイン：ルネ・ラリック

1924年頃

高3.8cm 口径30.0-30.3cm

M2863（ガラス皿コキーク文様）

鑄造ガラス。裏面底部中央にホイール・エングレーヴィングによるサイン「R LALIQUE FRANCE」、彫り込みでシリアルナンバー「No.3009」。反射光でブルー、透光でオレンジのファイアが出る乳白地のガラスを「オパールセントガラス」といい、ラリックは1924-25年頃から好んでこの素材を用いた。本作品のコキーク(貝)文はラリックの皿の中ではよく知られたデザイン。同デザインで径の異なるバージョンが作られている。

木村定三コレクション「欧米陶磁器およびガラス工芸」調査報告目録
(本文pp. 81-87)



藍絵縞文 アルバレッロ M1194 本文pp.81



藍絵花卉文皿 M1336 本文pp.82



白釉輪花鉢 M1548 本文pp.83



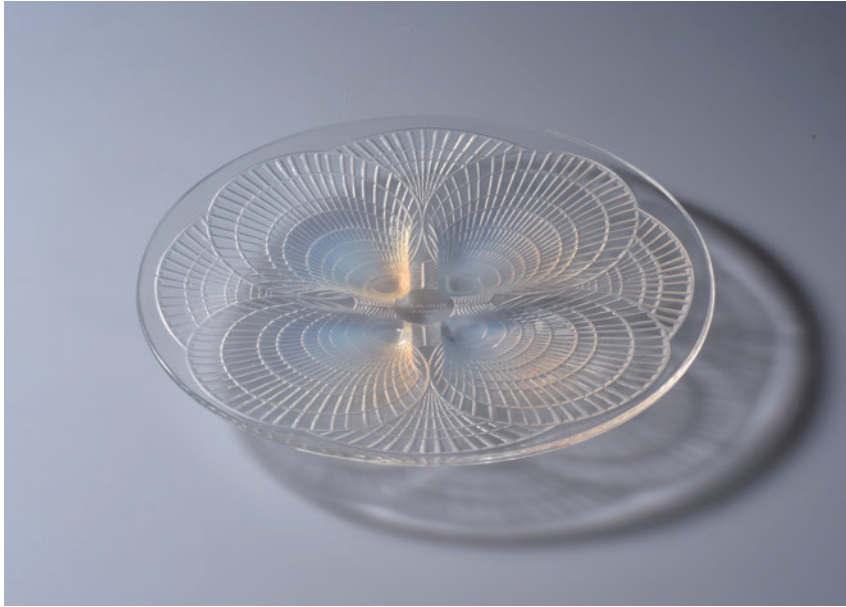
藍繪花鳥唐草文瓢形瓶 M1631 本文pp.84



白釉小鉢 M2291 本文pp.85



褐釉絞胎皿 M2216 本文pp.86



コキーク文オパールセイントガラス皿 デザイン：ルネ・ラリック M2863 本文pp.87